キャンパス・コラム

終 夜

理工学部の１号館にある庶務課の窓口で、殆んどの教職員と院生、学生は部屋の鍵を受け取り、帰る時に返還する。そのつど鍵出納表に時刻を記入して署名する。キャンパスが閉門するのは午後11時ときめられていて、それ迄に鍵は返さなければならない。徹夜で実験をする場合などは、あらかじめ届け出て、記入欄に朱色の「終夜」のスタンプを押してもらうことになる。

毎年のことだが、秋から冬にかけてこの「終夜」の朱文字が、鍵出納表のあちこちに咲き出し、年末から正月あけの間を除いて２月迄、その表は賑やかな色どりになる。４年生や院生が、論文作成の為の最後の実験や計算などに没頭している雰囲気が滲み出るような鍵出納表である。春先から始めた実験でも、やっとこの時期に自信のもてるデータが出てくる場合もあるだろうし、就職活動の為、実験の開始が心ならずも遅れた学生もいただろう。けっしてそれまで怠けていた訳ではない。勿論、論文提出の期限が近づいてきた圧迫感もいなめないかも知れない。

しかし、いずれにせよ、ひとつの行為の完成に向けて集中力を持続させた日々を経験した若者達は、それぞれ様々な充実感を得ることだろう。論文の出来の良し悪しとは別の色あいの記憶が、彼等にしばらくはとどまるだろう。

私の研究室の同窓会が年末に開かれた時、10数年前の卒業生のグループで、終夜の実験が話題になった。彼等の想い出のなか身は、実験テーマとは無縁の議論、口論を通じて「酒の良い飲み方をおぼえた」ことのようだった。

去年の暮れに院生が苦労して整理したデータを基に、学会の原稿締切を目前にして正月休みに私の自宅での終夜が待っている。まさに「怠け者の節句ばたらき」と言われそうである。

広報委員　榊原　剛（理工学部教授）

編集後記

明けまして、おめでとうございます。新たな「ミレニアム」が幕を開けました。一〇〇〇年代から二〇〇〇年代へ移る瞬間を、あなたはどういう気持ちで迎えましたか▼街じゅうが千年紀を祝う準備に気ぜわしいなか、また、世の中の関心がＹ２Ｋ問題に目が向いているなか、私はただ時計の針をじっと見つめていました▼よくよく考えてみると、私たちは歴史的に、ものすごく貴重な瞬間に居合わせているのです。同時に、この幕開けは21世紀へのカウントダウンの始まりでもあります。昨年の年明けを、どう迎えたかなんて、まったく記憶にありません。それだけ、新年を漠然と迎えてしまったのでしょう▼その点、この一年は21世紀へ渡る心の準備期間です。後々まで記憶に残る形で迎えたいと思いました。例年になく、そんな真面目なことを考えながら、二〇〇〇年を迎えました。今年もよろしくお願いいたします。

（木瀬　恵子）

Hakumon ちゅうおう

2000・１月号（第154号）
2000年（平成12年）１月１日発行

発　行　　中央大学広報委員会
〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉広報課　☎0426－74－2146
印　刷　泰成印刷株式会社
〒130-0026 東京都墨田区両国３-１-12
電　話　03-3631-8141